

## 中国の紙おむつ輸入と日中航路コンテナ輸送量

掲載誌・掲載年月：日刊 CARGO 201510

日本海事センター企画研究部

研究員 松田 琢磨

### はじめに

昨今の日本においては、中国人観光客の増加によるホテルの不足であったり、「爆買い」と呼ばれる大量の商品購入が話題になることがある。今回の記事で取り上げる、紙おむつも中国人が多く購入する品目であり、その影響を受けて一部のブランドでは日本でも品切れや販売制限が行われる様子まで見られている。今回の記事では、中国における紙おむつ輸入の増加の背景と日中航路コンテナ輸送の動向について述べていくこととする。

### 中国の消費動向変化と紙おむつの輸入動向

中国が経済成長を遂げるにしたがって、国民の所得水準も上がってきた。2005年においては中国本土の一人当たり名目 GDP は 1,749 ドルと同年における日本の 20 分の 1 に過ぎなかった。しかし、経済成長に沿って年平均 17.7% で増加し、14 年には 7,589 ドルとなり、日本の 20.9% まで近づいてきた。また、天津や北京、上海、寧波のある江蘇省、厦門や福州のある福建省、深圳や広州のある広東省では一人当たり GDP はすでに 1 万ドルを超えており、所得水準の向上に合わせて消費動向も都市部を中心により品質の良いものを求める方向へと変わりつつある。

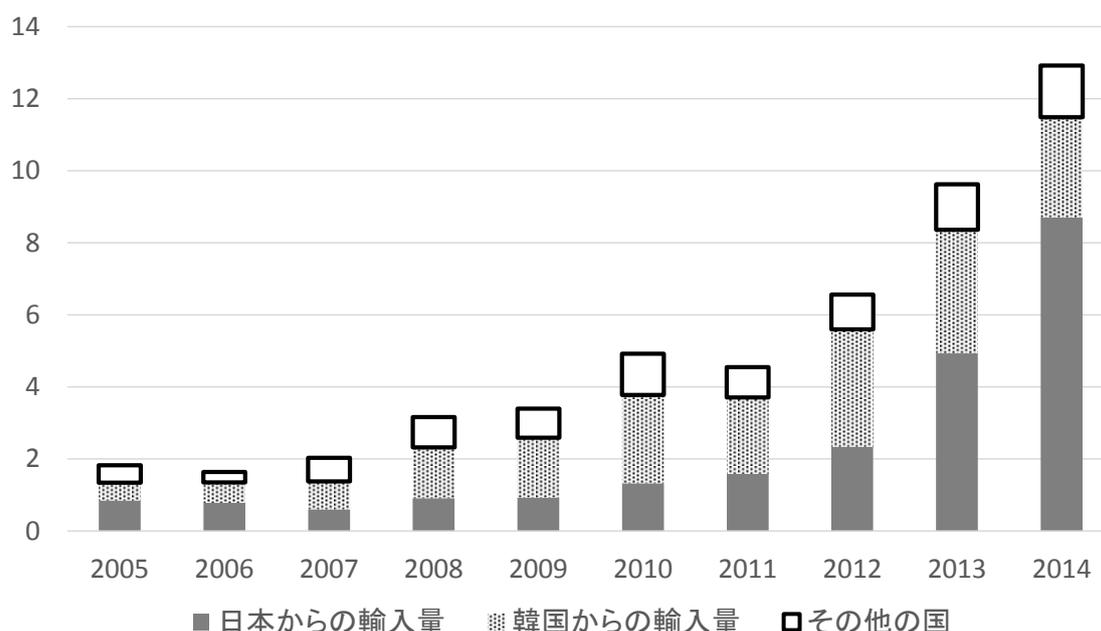
なかでも、紙おむつを含むベビー用品への出費も盛んなものとなっている。中国においては、一人っ子政策が実施されていることもあり、もともと子どもに対してお金をかける風潮がみられるという。さらに経済成長が可処分所得を増やしたことが子どもに対する消費拡大に拍車をかけている。ジェトロが 12 年に中国のベビー向け商品の市場に関して行った調査の報告書では、近年、欧州や北米と比べ中国のベビー用品や子ども用品の市場規模拡大が急速に進んでいると述べられている。また、中国の新聞によると、紙おむつ市場は 14 年においては 290 億元（約 5,800 億円（1 人民元＝20 円で計算））に達しており、今後も高成長が見込まれている。

このような状況を背景に、中国における紙おむつの輸入量が急速に増加している。図は 2005 年から 14 年までの中国の紙おむつ輸入量の推移を示している。05 年における紙おむつの輸入量は約 1.8 万トンであった。しかし、10 年には約 5 万トンに、12 年には 6.6 万トン、14 年には 12.9 万トンまで増加した。年平均の増加率は 24.3% にものぼっている。

紙おむつの輸入元は日本と韓国が大半で、両国からの輸入量が約 90% のシェアを占め

る。韓国の大田には米国キンバリー・クラーク社の製品である「ハギーズ」の工場があるため、おもにそれが輸入されているものとみられる。07年から12年までは韓国からの輸入量が日本からの輸入を上回る状況が続いてきた。しかし、13年と14年には日本からの輸入が急激に増加し、韓国を逆転した。

しかも、13年と14年における輸入増の大半は日本からの輸入が増えたことで起こった。実際、13年の輸入増46.7%のうち39.5%分が、14年では全体の輸入増34.2%に対して39.2%分が日本からの輸入増による寄与であった。



図：中国における紙おむつ輸入量の推移（2005～2014年、単位：1万トン）

データ出所：UN Comtrade

日本からの輸入が増加した背景のひとつには、中国においては紙おむつの「高級化」が進んでいることが挙げられる。クレディスイス社が15年1月に発表した資料では、中国市場において、吸水性や通気性などの機能が高かったり、赤ちゃんの肌に良い機能を追加するなどしているプレミアムタイプの紙おむつは11年時点で10%程度のシェアにとどまっていたものの、直近ではシェアを伸ばしており、15年には2割を超えるとの見込みが示されている。

日本の紙おむつ製品に対する評価は高い。中国国家统计局の傘下にある中国統計情報センターがインターネットでの調査を基に口コミ評価では、15年上半期においては花王の「メリーズ」、プロクター・アンド・ギャンブル（P&G）の「パンパース」、キンバリー・クラークの「ハギーズ」、大王製紙の「グーン」、ユニ・チャームの「マミーポコ」の順で評判が高い、という結果になった。上位5ブランドのうち3つ（メリーズ、

グーン、マミーポコ) が日本企業のブランドであり、パンパースも日本からの輸出が行われている。

また、中国においては e コマースを経由したおむつの売り上げが増加している。日本企業の中でも花王のメリーズは e コマースでのシェアが高く、さらに量販店などのチャネルでの売り上げを増やしていることで知られている。e コマース経由での売り上げが伸びているのは、かさの大きい紙おむつを自宅まで運んでくれる利便性のほか、価格が低いという利点があることが理由である。先に挙げたジェトロの調査報告によれば、ベビー用品の大半は代理店を経由して小売業者に製品が届く流通経路が中心とのことであり、直販の少なさがスーパーマーケットなど小売店での販売価格を押し上げている可能性が高い。現時点でも e コマース経由の購入比率は市場の 3 割程度を占めるとされているものの、直近でも中国最大の e コマースの最大手アリババが手掛ける電子商店街に花王が出店するなど e コマース経由での販売への注力は続いており、今後も e コマース経由の購入は増えていくとみられている。

#### 日本積み中国向けおむつ類の輸送動向

中国における紙おむつ輸入の急拡大は、日中コンテナ航路(日中航路)の統計にも表れている。中国による、日本からの紙おむつ輸入は大半で海上コンテナが用いられており、重量ベースで見ると 99.9%を占めている。12 年以降、日中航路では、日本・中国間(往航)も中国・日本間(復航)も荷動きがさえない状況が続いているが、紙おむつの荷動きは 12 年以降急増しており、15 年上半期においては日中往航の中でもっとも輸送量の増えた品目の一つとなっている。

表は、財務省発表の貿易統計をもとに、日本からの中国への紙おむつ輸出量について輸出される上位 5 位の税関別に取りまとめたものである。税関別輸出量はほとんどのケースで港別の輸出量に対応しており、この表のケースでも港別輸出量と読み替えてさしつかえない。また、日本からの輸出量のほとんどが海上コンテナで運ばれていることを踏まえて、Zepol"TradeIQ"のデータにある、日本から米国に輸出される紙おむつの重量と TEU の量のデータを用いて TEU 換算も行い、表に示してある。

表：輸出税関別中国向け紙おむつ輸出量(2012~2015 年 7 月、単位：トン、TEU)

	2012				2013				2014				2015(7月まで)			
	税関名	トン数	TEU換算	シェア	税関名	トン数	TEU換算	シェア	税関名	トン数	TEU換算	シェア	税関名	トン数	TEU換算	シェア
1	神戸	7,320	2,077	30.2%	東京	11,944	3,389	24.2%	大阪	13,779	3,910	16.1%	大阪	17,437	4,948	19.5%
2	東京	5,578	1,583	23.0%	三島川之江	8,923	2,532	18.1%	東京	13,581	3,853	15.8%	酒田	12,963	3,678	14.5%
3	今治	2,693	764	11.1%	大阪	6,922	1,964	14.1%	酒田	10,638	3,018	12.4%	東京	11,268	3,197	12.6%
4	大阪	2,377	674	9.8%	神戸	6,658	1,889	13.5%	神戸	10,414	2,955	12.1%	名古屋	11,117	3,154	12.4%
5	名古屋	1,881	534	7.8%	今治	5,100	1,447	10.4%	名古屋	9,352	2,654	10.9%	三島川之江	8,559	2,428	9.6%
	その他	4,384	1,244	18.1%		9,718	2,757	19.7%		27,954	7,931	32.6%		28,231	8,010	31.5%
	合計	24,233	6,876	100.0%		49,264	13,978	100.0%		85,718	24,321	100.0%		89,575	25,415	100.0%
	前年比					103.3%				74.0%				4.5%		

データ出所：財務省「貿易統計」

注：トンから TEU への換算には Zepol™TradeIQ™を使用

注：TEU 換算値はすべてコンテナで運ばれたと仮定した場合の推計値

注：15 年の前年比は 15 年 7 月までのトン数と 14 年全体のトン数を比べたもの

日本全体では 12 年において 2.4 万トン、0.7 万 TEU の輸出量であったが、13 年には 4.9 万トン、1.4 万 TEU と 103.3%の増加（重量ベース）となった。14 年においても増加は続き、8.6 万トン、2.4 万 TEU が中国に輸出され、これは前年比 74.0%の増加であった。15 年は 7 月の時点ですでに 14 年の実績を超えており、7 月時点で 9.0 万トン、2.5 万 TEU が輸出されている。

港別にみると、やはり、生産拠点に近い港からの輸出が多くなっていることがわかる。製紙業の多い関西地域を背後地に抱え、P&G の紙おむつ生産拠点である明石工場に近い大阪港や神戸港、花王のサニタリー部門工場、大王製紙の生産拠点、ユニ・チャーム四国工場に近い愛媛県（三島川之江港、今治港）の港が上位にある。また、静岡県に大王製紙とユニ・チャームの生産拠点があることから名古屋港が上位の輸出港になっているほか、栃木県に花王と大王製紙、福島県にユニ・チャームの生産拠点があることから東京港も上位に入っている。

直近で目立つのは 14 年以降酒田港からの輸出が大きく増えたことである。15 年 7 月時点では大阪港に次いで全国第二位のシェアとなっている。これは花王が 13 年に酒田工場内にサニタリー製品工場を新設、2014 年 4 月から本格稼働したことが寄与している。酒田港の港湾統計によると、2014 年の中国向けコンテナ貨物輸出量は 4,827TEU となっているが、表にある中国向け紙おむつ輸出量の推計値は 3,678TEU となっており、紙おむつの輸出がコンテナ貨物の輸出量を押し上げている。また、15 年初めは週 3 便であった外航コンテナ航路の便数は週 6 便に増加し、紙おむつの原料となるパルプなどの輸入も増加しており、紙おむつの輸出は港の活動を活発化させる起爆剤となっている。

## おわりに

これまで高度成長を続けてきた中国であったが、直近では経済成長の鈍化と内需の停滞が報じられるようになってきた。しかしながら、都市部を中心に、所得の高くなった人々がよりよいものを求める方向へと消費行動を変化させており、もともと子どもにお金をかける傾向があることとあいまって、紙おむつなどベビー用品への出費を増加させている。今後、中国では急速な高齢化の進行が懸念されているものの、現在でも紙おむつの使用率は日本の 2 割程度にとどまっているとされ、市場拡大の余地は大きい。

材料となる高分子吸収剤や不織布の生産に関して日本メーカーが技術的に優位に立っており、紙おむつについても日本メーカーの技術面での優位性が高いこと、15 年 6 月に紙おむつの輸入関税が引き下げられた（7.5%から 2%）ことなどの要因もある。その

ため、中国向けの輸出に関しても、直近の過熱状態が続くとは考えにくいですが、安定的に輸出が維持される可能性は高い。その影響を受けて酒田や三島川之江など生産拠点を近くに抱える港の荷動きも活発化されるものとみられる。

以 上